

就活体験記

神作 聡美 (文学部文学科ドイツ文学専修)

1 はじめに

まずは単刀直入に、私の就職活動の結果からお話しします。40社の採用試験を受け、6社から内定を頂きました。2社は出版社、2社は書店、残りは印刷会社と製本会社が1社ずつです。私の就職活動の戦略は、「数打ち当たる」といった方向性でした。この中に志望業界のある方も、そうでない方も、「この業界の採用活動はこんな感じで進むのか」、「こういう就活の仕方もあるんだなあ」と気楽に読んで頂ければと思います。

2 就職活動の方向性

第一志望は出版社、その次に出版取次（出版社と書店を繋ぐ会社）、印刷会社、そして書店の順に志望して活動していました。本に関わる仕事、ということを中心に、売る側よりは作る側に近い方への就職を考えていました。就職活動の時期としては、出版取次→印刷会社→書店→出版社の順に進んでいきました。それぞれの業界がこの順番で進んでいったことが、私の就活にはプラスであったと感じています。私は当初、出版社しか視野に入れておらず、他の業界を受ける気は全くありませんでした。しかし、就活本番を目前に、当時就活のことでお世話になっていた方に、「このままでは出版社は全落ち」、「就職浪人する覚悟をした方がいい」と言われたことをきっかけに、考え方を変えました。

もちろん、企業側にとっても採用活動は今後を左右する問題であり、時間を割いて真剣に行なっているものなので、就活生側も、本命への練習という気軽な態度で受けていいものではありません。ただ、志望には必ず順番はありますし、戦略というものを持つべきだと感じます。私は数をこなして大本命に向けて場慣れしていく戦略を取りましたが、これから一緒に働く私の同期は、就職先である1社しか試験を受けておらず、大本命に対して時間をじっくりかけるタイプで成功しています。同じ企業に受かっていても、これだけ就活の方法は違うので、自分にあった戦略を練ることが大切なのではないかと思っています。

3 就活開始一発目のミスと出会い

私が就職活動を意識し始めたのは、三年生の夏休みでした。出版系の企業を手当たり次第にチェックリストに入れていくところから始めましたが、その時期にインターンシップを行なっている企業は少なかったかと記憶しています。その中で1社、1日から1週間程のインターンシップを実施している企業を見つけました。夏のインターンシップということもあり、とりあえず1日のコースに応募したのですが、ここで起きたミスがある意味、私の就職活動の結果を大きく左右したのだと思います。

というのも、私が応募していたのは出版社ではなかったからです。その企業はいくつかの業種を兼ねたグループ企業であり、1日だけのインターンシップは、出版とはかけ離れた、他の企業の採用活動をサポートするような業種でした（以下ではこちらをM社、出版を行う方のグループ企業をE社と記します）。今思えば非常に失礼なことですが、その日同行させていただいたM社の社員さんに、出版志望であることを伝え、その日は採用担当側からの視点で他社の説明会を見学させていただきました。後日、出版を行うE社にご紹介いただいて、無事1週間のインターンシップに参加することになります。また、この件がきっかけで採用

活動をサポートする方のグループ企業の方と接点を持ち、自己分析や面接の練習を手伝っていただいたり、いくつかの企業を紹介していただいたりすることができました。前章で述べた、出版社一本に絞る、という私の考えを変えるきっかけを作ってくくださったのも、この方でした。

4 インターンシップと話題作り

紹介されて参加できた E 社でのインターンシップは、会社の中で仕事の体験をするという形ではなく、出版業界を目指す学生が、業界で実際に働く人の考え方や大まかな仕事内容を学ぶ、というものでした。インターンシップの会場があるその街を各々歩き回り、本のジャンルや取り上げるものを自由に決めて企画発表を行ったり、実際にこれから書籍化される原稿の校正を手伝ったり、新聞の記事を要約・議論したりということを経験しました。

インターンシップ後も E 社へ通い、学生主体のフリーペーパー作成や、「偉人甲子園」というイベントの企画・司会などを経験させていただきました。インターンシップと一緒に活動していた子たちが次第に参加しなくなっていく中での焦りや不安もありましたが、これらは後に就活のとても良い話題になりました。特にイベントの司会では、私はまた大きなミスをしたのですが、これが面接では面接官の方々にウケていたのが印象的です。フリーペーパー作成に関しては、話題としてはありきたりかもしれませんが、大学の勉強と並行して忙しく取材や作業をする中で、「それでも自分はやっぱりこういうことを仕事にしたいんだ！」と再確認できた経験でした。そしてなにより、今まさに自分の志望する業界の中にいる方と雑談できる環境というのは非常に大きかったと思います。業界内のことはもちろんですが、なにより純粋に、世の中の色々なもの（真面目な話題以外の方が特に面白い）に対する見方を知ることが自分自身の視野を広げてくれていたように感じます。

5 就活本番

初めて説明会と選考に参加したのは、1月のことでした。前述の M 社の方に紹介された、不動産系の企業の説明会でした。一次選考はまさかのグループ対抗ジェスチャーゲーム。なんとか通過して 2 月に初めての集団面接と個人面接を経験することになります。2 月は週 2~3、3 月は週 3 の説明会や選考があり、4 月からはそれに加えて週 3 つ以上の ES 締め切りが入ってきました。次の章でも触れますが、さらにそれに加えて週に 3 日は固定でアルバイトをし、ゼミと司書課程のために週 2 日は大学に行き、5 月以降には土日にも容赦なく選考が入ってきたため、ほとんど家から出ない日はないような生活を送っていました。

初めて内定を頂いたのは 5 月の上旬です。大手の出版社はその頃には次第に選考が始まっていたのですが、中小の出版社は ES の結果が返ってくるかどうかくらいの時期であったため、お返事するのに時間を頂けるようお願いしていました。出版社以外の内定は 6 月には出揃った状態でしたが、出版社の最終選考が終わるのが早くても 7 月いっぱいとのことであり、期限をギリギリまで延ばしていただいた内定を、一つずつ辞退しながら結果を待つことになります。この期間は選考の数がピークで忙しい頃よりも、精神的に負担のある時期でした。

初めに内定を辞退させていただいた企業の方はとても親切にしてくださり、辞退した後も、内定を承諾する企業を決める最後まで、私の将来のことを考えて、業界内の視点からのアドバイスをたくさんしていただきました。また、その他の企業に関しても、内定を頂いてから承諾をするまでの期限を延ばしていただいただけでなく、人事の方をはじめとして、立教の OG の方や若手社員さんとの面談や懇親会などの場を提供してくださる企業が多く、内定辞

退のご連絡は、就活のどんな過程よりも辛く感じていました。

選考の内容にも少し詳細に触れておきたいと思います。よく聞く話かとは思いますが、出版社とそれ以外の業界では大きく異なります。出版社のESはとにかく手書き、そしてA4サイズの用紙に大体3~4枚の容量でした。筆記試験に関しても、他の業界は高校受験レベルなのに対し、中小出版はそれに加えて自社の出版物に関する問題や時事問題と作文、大手出版はいわゆる「非常識問題」(対策のしようのない問題)が出題されていました。また、面接では、他の業界に比べて特に「入社後にやりたい企画」が重視されていたように感じます。

内定後に人事の方に伺ったことですが、面接では「質問にどんな形でも回答する姿勢」や「掘り下げたくなる回答」、そして少し驚いたのが、「本好きと公言しないこと」を重視していたそうです(あくまで私の就職する出版社はですが…)。また、私自身が心がけていたのは、その企業に合った書籍の企画をいくつか考えていくことと、その企業の出版物を図書館で古いものから新しいものまで知ることです。面接官すら忘れていたような出版物の名前を出して驚かれたことも度々ありました。

最後に、民間企業への就活と司書課程とのこともお話しします。私は民間企業に絞って就活をしていたので、やはり「なぜ司書を目指さないのか」という質問は、意外と少ないながらも、面接で出てくることがありました。しかし、それ以上に質問されたのは、司書はどういう職業で、司書課程ではなにを学ぶのか、ということでした。司書課程以外の授業に関しても同じことが言えますが、今までの授業を振り返り、それらに対する自分なりの考えをまとめておくと思えます。

6 就活の息抜き

就活中は息抜きも大切に、とよく言われるものです。とはいえ頭の片隅に就活のことがグルグルしていて、完全には休まらないことも多いかもしれません。そのとき私は「息抜き」というよりは、「自分に戻ること」を意識していました。その道具の一つがアルバイトです。固定シフトなこともあり、就活中も常に週に3日は働いていました。1日のうちに面接に行き、授業に出て説明会に行き、からアルバイト、という生活は正直楽ではありませんが、一年生の頃から継続していたアルバイトは、今まで通りの自分を保つための良いスイッチになってくれていました。

また、就活の調子が良くても悪くても、友人と遊んだり趣味のライブ鑑賞に行ったりという息抜きを、変に我慢し過ぎることだけはないようにと気をつけていました。

7 おわりに

私の就活の進め方は、私自身には合っていましたが、必ずしも成功する方法ではありませんし、数を打って経験を重ねる、というのは少なからず体力も精神力もすり減らしていくやり方です。そのため、人に薦めたくて今回こうして文章に残したわけでもありません。私自身、周囲に出版業界の就活を経験した先輩にいなかったため、手探り状態で進めるしかなかった状況に少なからず苦労したからこそ、記録しておきたいと思い、この機会をいただきました。同じように司書課程で学ぶ方をはじめとして、同じ立教で学ぶ後輩の誰か一人にでもこの体験記が役立ち、自分なりの戦略で満足のいく就活を終えていただけたらと思います。